

Naples, Nancy A., and Barbara Gurr, 2014, "Feminist Empiricism and Standpoint Theory: Approaches to Understanding the Social World," Hesse-Biber, Sharlene Nagy eds., *Feminist Research Practice: A Primer*, Thousand Oaks: Sage Publications, 14-41.

ナンシー・ナポリとバーバラ・ガー, 2014, 「フェミニスト経験主義とスタンドポイント理論——社会を理解するためのアプローチ」

※ () の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿は、フェミニスト方法論およびフェミニスト認識論の解説書として高い評価を得ている *Feminist Research Practice: A Primer* の第二版に収録されている。本稿では、フェミニスト認識論のうち、フェミニスト経験主義[feminist empiricism]とフェミニスト・スタンドポイント理論[feminist standpoint theory]についての解説がなされる。

■導入 (14-15)

- フェミニスト哲学者の Sandra Harding (1987) は、「調査においてフェミニスト的な特有の手法は存在するのか」という問いをたてた。その問いに答えるなかで彼女は、認識論(「知識に関する理論」)と方法論(「研究がどのように実行されるかについての理論」)と手法(「エビデンスを集めるための技法」)を区別し、認識論的な立場は、方法論と手法に影響を与えることを指摘した。
 - ・ 本稿で私たちは、フェミニストリサーチにおける二つの主要な認識論的アプローチである、経験主義とスタンドポイント理論について説明する¹。
- 1960年代から70年代における女性運動は、社会科学の伝統的な枠組みに挑戦した。そのうちの主要な挑戦のひとつは、知識の本質と知識生産についての支配的な理解に対する挑戦である。
 - ・ 「真実」は多様に定義/理解されうるし、知識は政治的なものであるというフェミニストによる主張は、「誰が知識生産の伝統的な枠組みのなかで利益を得ていて、誰がそれらによって不利な立場に置かれるのか」という問いへと研究者たちを動機づけた。
- フェミニスト研究者たちは、伝統的な理論的・方法論的アプローチのなかに潜在的に埋め込まれた権力の不均衡を再生産しないような仕方、どのように彼・彼女たちの方法

¹ Harding は、フェミニストの認識論を、フェミニスト経験主義[feminist empiricism]、フェミニスト・スタンドポイント理論[feminist standpoint theory]、フェミニスト・ポストモダニズム[feminist post modernism]の3つに整理している(Harding 1986: 24-29)。本稿はこの整理に依拠し、フェミニスト経験主義とフェミニスト・スタンドポイント理論に焦点を当てている。

論的実践を説明するのだろうか？

- ・ この問いは、フェミニスト理論や方法論における 3 つの発展へとつながる。それは、客観性への伝統的なアプローチに対する批判と、知識生産における特権に対する精査、そして立場[standpoint]とポジショナリティ[positionality]への着目である。

■知識とは何なのか、私たちはどのように知るのか？一つの答えとしての経験主義(15-18)

- ・ すべての知識は経験に基づくという認識論もしくは「知識獲得方法[ways of knowing]」は、経験主義と呼ばれる。経験主義においては、すべての知識は感覚上の経験から得られ、社会的文脈の外部で比較的一様に存在し、その反復可能性[replicability]によって正しいものとして証明される。
 - ・ 経験主義における経験の反復可能性の強調は、仮説と実験的状况に依拠しながら、科学的手法の発達を促進した。経験主義的アプローチは、社会的文脈の外にすでに真実が存在しているという前提に立つため、研究者は知識生産の参与者とならない。したがって経験主義に立つ研究者の仕事は、自身の考えや価値観、もしくは社会的枠組みを押し付けることなく、社会的文脈の外部にある真実を発見することである。
- ・ 20 世紀初期に、経験主義における科学的手法は実証主義と関連づけられるようになった。実証主義とは、実験的に証明されうる たったひとつの知識が科学的に妥当であることを唱える学説である。
 - ・ 20 世紀初頭から半ばにおいて、経験主義における実証主義の強調が、実験に基づく調査やサーベイリサーチといった特定の手法のステータスを高めた。
- ・ 多くのフェミニスト研究者は、手法、理論、知見における性差別的で男性中心の想定を暴露し、修正するために、経験主義の基本的な教義を受容し、科学的調査の方法論的枠組みを使おうと試みている。
 - ・ たとえば自然科学や生物学を専攻するフェミニスト研究者は、フェミニスト経験主義の指針を生み出すために研究してきた²。
- ・ しかしながらフェミニスト経験主義者は、科学と政治の間の繋がりを見落としているとして、ほかのフェミニスト研究者から激しく批判されてきた³。

² たとえば、Vandana Shiva (2005, 2010)、Anne Fausto-Sterling (2000)、Tom Shakespeare (2006) などが挙げられる。

³ 1980 年代後半から 90 年代には、Ruth Behar (1993, 2007)、Joan Scott (1988)、Dorothy Smith (1987, 1992) といったフェミニスト研究者たちがフェミニスト経験主義を批判した。

- ・ この文脈において Harding (1991) は、フェミニスト経験主義が成立しうるのか疑問を呈した。

■客観性についてのフェミニスト的分析 (18-21)

- ・ 実証主義的認識論の根幹をなすのは、客観性の強調である。実証主義は、主観的な判断や解釈を除去することによって真理[truth]がもたらされると考えるため、主観性が知識の妨げになると決めてかかっている。
- ・ 客観性についての議論において最も著名なフェミニスト理論家の一人である Harding (1995) は、実証主義における客観性と中立性の同一視が、政治の権力を隠蔽するために機能すると主張する。
 - ・ Harding は、この状況に対処する一つの方法として、「強い客観性[strong objectivity]」の発展を要求する⁴。強い客観性は、知識生産者の社会的位置と知識生産の社会的文脈への注目を強調する。
- ・ Harding は、より客観的でより妥当な知識は、社会生活に関する知識が生み出されている組織の外に伝統的に置かれてきた女性をはじめとする社会的弱者の、生きられた経験を調査することによって導かれると主張する。Harding (1986) と Nancy Hartsock (1983) は、従属させられた集団の視点から生み出される知識は、より強い客観性を提供することを強調している。
 - ・ この主張は、認識的権威や認識的特権への疑問へとつながる。

■認識的権威と認識的特権とは何か？ (21-24)

- ・ 認識論的権威[epistemic authority] と認識論的特権[epistemic privilege]は同義ではない。Janack M. (1997) によると、認識論的権威は、我々の信頼性そして「客観性」への他人による判断の結果として与えられるものである。他方で認識論的特権は、より社会的に複雑である。認識論的特権とは、耳を傾けてもらえる権利および能力 [right and ability to be heard] であり、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、認知能力、身体能力、市民権、知識生産や知識共有のコミュニティなどを含む、無数の移り変わる社会的文脈のなかで付与され、強化され、制限されうる。

⁴ 「強い客観性」とは、Harding の造語である。Harding によると、従来の科学で想定されてきた価値中立性を要求する「客観性」は、研究者集団が保持している（しばしば支配集団の）価値を自覚し相対化できていない点で、むしろ非常に「弱い」ものだという。それに対して、「価値自由」なる呪縛から逃れ、周縁化された集団の立場から、中立性の名のもとに幅を利かせている支配的集団の価値や利害関心を認識するあり方の方が、「強い」客観性なのだという。そこでは知識の対象だけではなく、知識の主体が批判的考察に付される（山森 2014）。

- ・ 認識論的特権の不均衡は、フェミニストの間にも存在している。たとえばポストコロニアルフェミニストは⁵、地政学的構造における認識的特権の影響を指摘している。
- ・ 認識的特権は知識を生産する個人にのみ属するのではなく、学問分野にも位置づけられる。

■フェミニスト・スタンドポイント認識論と方法論的革新 (24-27)

- ・ フェミニスト・スタンドポイント理論は、様々な理論を含む広い分類である⁶。
 - ・ 代表的な理論として、Nancy Hartsock (1983) のフェミニスト唯物史観[feminist historical materialism perspective]⁷、Donna Haraway (2003) の状況に置かれた知[situated knowledge]⁸、Patricia Hill Collins (1990) の黒人フェミニズム思想[black feminism thought]⁹、Dorothy Smith (1987, 1990a, 1990b) の女性のための日常世界の社会学[everyday world sociology]などが挙げられる¹⁰。
 - ・ フェミニスト・スタンドポイントの論者は、主に質的手法を用いる。

⁵ ポストコロニアル・フェミニズムは、先進国のフェミニズム理論の批判として始まり、植民地主義と性差別の両方に注意を払うことを目指している。代表論者は Chandra Mohanty (2006)、Devon Miheuah (2003) などが挙げられる。

⁶ フェミニスト・スタンドポイント理論とは、これまで等閑視されてきた女性に対する抑圧の存在を明らかにするために、女性の「立場[standpoint]」を中心とした新たな視点を取り入れた方法論である (児玉 2013)。Harding (1986) によると、スタンドポイント理論は、女性の観点[perspective]を、社会生活についてのわれわれの解釈や説明のための道徳的かつ科学的に望ましい基盤としての「スタンドポイント[standpoint]」へと変容させることを目指す (Harding 1986: 26)。

⁷ Nancy Hartsock (1983) は、マルクス主義を批判的に検討しつつ、その史的唯物論[historical materialism]による権力分析が、男性支配の構造を解明するのに有効であると指摘する。Hartsock は、男性による女性への支配構造を解明するのに有効な方法論としてフェミニスト・スタンドポイントを挙げている (児玉 2013: 8)。

⁸ Donna Haraway は、男性中心主義的な人文社会科学が、全てを見通しているかのような語り口で、普遍的な概念や理論を主張することを厳しく批判してきた。その代わりに、「物事がどのように動き、誰が行動の中において、何が可能なのかということ」 (Haraway 2003=2013: 14) をフェミニズムは追求すべきだと提案し、具的な物事における具体的な関係性を見るための知として「状況に置かれた知[situated knowledge]」を提案する (鈴木 2020: 13)。詳しくは鈴木 (2020) を参照されたい。

⁹ Patricia Hill Collins (1990) は、Angela Davis、bell hooks、Alice Walker、Audre Lorde といった著名な黒人フェミニスト思想家の作品を取り上げ、ブラック・フェミニストの思想を総合的に概観した。

¹⁰ Dorothy Smith(1987)は、「女性」を、主体として、知る人として、彼女たちの実際の日常生活世界に位置づけられている存在として捉え直そうとした (上谷 2017: 5)。詳しくは上谷 (2017) を参照されたい。

- フェミニスト・スタンドポイント理論は当初、1970年代から80年代初頭のマルクス主義フェミニズムの議論に対応する形で発展した¹¹。スタンドポイント理論家は、支配関係がどのようにジェンダー化されているのかについて説明することを目指す。
- フェミニスト・スタンドポイント論者は、権力関係が知識生産をどのように形作るのかを明らかにするために、自己再帰的アプローチ[self-reflective approach]の理論化に賛同する。
 - ・ たとえばHarding (1991)によると、強い客観性を生み出すためには、知識生産のプロセスの全ての関与者の視点を考慮に入れ、調査者と被調査者の関係を分析する必要がある。このアプローチは、経験主義と対照的である。

■異なるスタンドポイント・アプローチ間の類似点 (27-30)

○「立場」の概念化のアプローチの差異と相互批判

- スタンドポイント理論における「立場[standpoint]」の定義は、それぞれの論者によって異なる。
 - ・ Nancy Naples (2003) は、立場の概念化の差異に着目しながら3つのスタンドポイント・アプローチを明らかにした。そのアプローチとは、(1)立場を、女性の社会的立場や経験のなかで具体化されるものとして捉えるアプローチ、(2)立場を、コミュニティのなかで構築されるものとして捉えるアプローチ、そして(3)立場を、調査をはじめの地点として捉えるアプローチである。
- (1)のアプローチを批判する人々は、同一で一貫した立場を有するものとして女性を概念化することが、本質主義につながると指摘する。
 - ・ たとえばブラックフェミニストのスタンドポイント理論家は、有色女性の政治的意識は、共通した本質的な性質というよりもむしろ彼女たちの生活の物質的な現実から発展し、共通性だけではなく彼女たちの経験の多様性も共に反映していると主張する。
- (2)のアプローチは、「女性」や階級、そのほかの具体化されたアイデンティティを、コミュニティのなかで構築されるとみなす。
 - ・ これに対して(3)のアプローチは、立場を特定のコミュニティや集団へと結びつけることに抵抗し、コミュニティの流動性を捉えるための枠組みを提供する。

¹¹ マルクス主義フェミニズムとは、家父長制と資本主義の両者の視点から女性差別を分析しようとする立場である。

○スタンドポイント理論の共通点

- スタンドポイント認識論の内部には多様な立場が存在するが、全てのスタンドポイント論者は経験の重要性を強調する。
 - ・ 集団における意識高揚のプロセスによって女性たちは、経験を共有し、女性を抑圧する社会的政治的メカニズムを発見・分析し、社会変化のための戦略を発展させることができる。
- スタンドポイント理論家は、スタンドポイント理論の発展と、フェミニスト的な政治的ゴールを目指す。フェミニストの実践の観点から見ると、スタンドポイント認識論は、支配関係がどのように女性の日常の輪郭を描いているのかを明確にするための方法論的資源を提供する。支配関係を認識することができれば、女性たちはプロセスやシステムに異議を唱えるために行動することができる。

交差する理論化——クイアスタンドポイント認識論へ (30-32)

- Nancy Naples (2009) は、先述の3つのスタンドポイント・アプローチに加え、認識論的アプローチという4つ目の枠組みを概念化した。認識論的アプローチは、ジェンダー、人種、そして階級の不平等および、セクシュアリティと文化などの交差性 [intersectionality] を考察できるという点において、他のアプローチに比べて、より分析力を有する。
 - ・ このアプローチはクイア理論やクイア方法論と関連している¹²。

結論 (83-84)

- フェミニスト経験主義者とフェミニストスタンドポイント認識論は、日常の輪郭となる「支配関係[relation of ruling]」(Smith 1987) を明らかにするための重要なアプローチであり続けている。
- 知識生産を理解するための新しい方法を発展させるフェミニスト研究者の仕事は、社会科学に大きな影響を与えている。とりわけフェミニストの実践と認識論との繋がりは、理論的観点だけではなく新しい方法論的アプローチの発達をも促進してきた。

¹² クイア理論を提唱した Teresa de Lauretis によると、クイア理論は、学術界において伝統的に「理論」として通っている異性愛的土台と前提に異議を唱えることと、性的欲望と性的快楽の理論化の試みにおいて、逸脱しようとするすべてのことに関心を呼び寄せることを目的とする。すなわち、それまで「理論」として名指されたものの前提を批判する営みである「理論をクイアにすること」と、従来の理論化の試みから逸脱するような研究や事例に着目する態度を示す「理論をクイアすること」の2つが、クイア理論という表現が創出された主要な目的であった(島袋 2020)。

【参考文献】(Naples and Gurr (2014) に未記載の文献を挙げる。)

- Haraway, Donna, 2003, *Companion Species Manifest: Dogs, People, and Significant Otherness*, Chicago: Prickly Paradigm Press. (=永野文香訳, 2013, 『伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」』以文社。)
- 児玉由佳, 2013, 「スタンドポイント・アプローチについての批判的検討」児玉由佳編『ジェンダー分析における方法論の検討』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 6-15.
- 島袋海理, 2020, 「クィア理論の制度化・規範化を考える——David Halperin “The Normalization of Queer Theory”」『教育論叢』名古屋大学大学院教育学研究科「教育論叢」刊行会, 63: 41-47.
- 鈴木和歌奈, 2020, 「実験室から「相互の係わりあい」の民族誌へ——ポスト・アクターネットワーク理論の展開とダナ・ハラウェイに注目して」『年報 科学・技術・社会』29: 3-29.
- 上谷香陽, 2017, 「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』27(2): 1-16.
- 山森亮, 2014, 「ポスト構造主義 vs.社会的存在論? ——フェミニスト経済学の哲学的基礎をめぐって」『季刊経済理論』53: 3-36.